

啓蒙、フランス革命と初期 Say の経済思想

喜多見 洋 (大阪産業大学)

1. フランス革命とセー

本報告では、啓蒙、フランス革命とジャン=バティスト・セー(Jean-Baptiste Say, 1767-1832)の初期の経済思想について、彼の親族である Delaroche、Delessert との関係に注目しつつ検討する。「初期セー」とは、彼が 1780 年代に知的活動を開始してからその主著『経済学概論』初版(1804)の出版までの時期をさしている。

この時期のフランスは大革命とその後の混乱期にあっている。セーは、1785 年から 86 年にかけて約二年間イギリスに滞在して商業、実業を学んでいるが、1787 年にはパリに戻り、同時代の多くのフランス人と同様に革命を経験している。彼とフランス革命の関係を示すものとしてよくあげられるのは、セーがエティエンヌ・デュモンに宛てた 1829 年 3 月 5 日付けの手紙からの、次の文章である

「私 [セー] がミラボーの購読者を受け付けているにすぎなかったときに、あなた [デュモン] がミラボーに助言を与えていたのを、私は覚えています。」¹

革命初期に、セーはミラボー伯爵の『プロヴァンス通信』の予約購読係として働いており、当時そこにデュモンもミラボーの側近として協力していたことを回想する文章である。まだ 20 歳そこそこだったセーが革命の重要人物たちのごく間近で実際に活動していたことが確認できる点で興味深い。だがこの他には、以下で論じる点を除いて、革命期のセーの知的活動に関連した出来事はあまり知られていないし、ましてや彼の経済思想に関して明らかになっていることは多くない。比較的よく知られている出来事といえば、セーと『国富論』の出会いであろう。これは、セーが、イギリスから戻り、当時勤務していた生命保険会社の重役エティエンヌ・クラヴィエール(Étienne Clavière, 1735-1793)から『国富論』を借りて読んだということである。今日ではこの事実から、革命前のセーの視野に経済学が入っていたことを確認したり、あるいは彼がクラヴィエールから『国富論』を借りて読んだことにより少なからぬ影響を受けたという点を指摘したりするのが一般的である。

確かに上の事実は、革命前の時点でセーがすでに経済学、それも当時最新のイギリスの経済学に一定の関心を持っていたという点で注目に値する。しかもセーに『国富論』を貸し与えたのは、この数年後、フランス革命の最中にフランスの財務大臣に就任するクラヴィエールである。彼は、ジュネーヴ出身の銀行家で、セーの父ジャン=エティエンヌ・セーの「同郷の友人」²である。「ジロンド派のなかで財政についての主要な理論家」(13)³であり、

¹ Ch. Comte, E. Daire et Horace Say (éds), *Œuvres diverses de J.-B. Say*, 1848, p.556.

² ジュネーヴ図書館(BGE)に残されているジュネーヴの文書館のアルシヴィスト L. Sordet によって作成された手書きの人名辞典の Say の項目には“Clavière compatriote et ami de son père”と記されている。Cf. L.Sordet, *Dictionnaire des Familles Genevoises*, 1869.

³ 以下、本稿でのページ数のみの表記は『全集』第 5 巻(*Les Œuvres complètes de J.-B. Say*, vol.5, 2003)からの引用である。

セーに『プロヴァンス通信』の仕事を紹介したのも彼だと言われている。これらを考えあわせるなら、上の事実が、セーの経済思想を考える際に決して看過できないものであることは間違いない。

けれども、啓蒙の世紀が終わろうとしていたこの時期のセーの知的関心は、はたして経済に向かっていたのであろうか。答えは否定的である。少なくとも彼の主要な関心は、経済よりもむしろ演劇などの文芸の方向に向かっており、彼の活動も文芸の領域での活動の方が目立っていたといった方がよいだろう。われわれが初期セーの経済思想との関係で注目すべき知的活動の成果は他にある。

そうしたもののうちの一つは、まずセーが最初に出した小冊子である。革命が始まろうとしていた時期に、セーは言論の自由を説いた小冊子「出版の自由」を著わしている。また彼は、ベンジャミン・フランクリンの著作『富にいたる道』(1757)の仏訳『善良なりチャードの科学』(1794)に「フランクリンの生涯の要約」という題の論文を付けている。さらに彼は、1794年から18世紀末まで5年ほど、雑誌『デカド・フィロゾフィック』の編集にたずさわっており、そこで実質的に編集長の役割を果たすとともに、この雑誌にいくつかの論文や翻訳を掲載している。そして最後に1800年、彼は、『オルビー』を出版する。

アンシャン・レジームから執政政府期まで経済思想との関連で注目すべきセーの知的活動の主な成果をあげるとこのようになる。そこで、以下ではこれらについて見てみよう。

2. 「出版の自由について」

この小冊子が発表されたのは、「1789年初め」であり、革命直前のフランスの思想的、社会的状況を反映していると考えてよいだろう。セーは、状況が彼を大胆にさせ、発言しても迫害されないことを確信して、出版の自由を擁護する(149)と述べており、後年書かれたと推定される「紙片」⁴には、「旧い政府は、まだその形式、検閲官、警察代理人等、とともに残存していた、けれども著述家はみな、行政において起こるべきだと期待していた改革についての彼らの見解を詳しく説明したいと強く望んでいた」(156)とある。さらにセーは、この小冊子を発表した意図について「紙片」に「私は、依然として有力な人々、とりわけネッケルがその一員をなしていた内閣を、可能なあらゆる動機によって、知性の光へのあらゆる影響力を発揮することに駆り立てたかった」(156)と書いている。

セーによる出版の自由の擁護は、基本的に「自由な出版は、束縛によって妨げられた出版ほど社会にとって危険ではない」(153)と考えるものであり、彼は「出版の自由が、寛容と人間性につながることで習俗を穏和にする有益な哲学や文芸、文明、国家の行政に、どれだけ好ましいか」(150)として、「フランスの中に、フランスが生み出した考え(*idées*)が流通するままにしよう」(149)と主張する。

彼によれば、出版活動を支え、促進したのが印刷術であり、「印刷術の発明が、われわれを不完全な状態から引き出した。それによって人間は、あらゆる国、あらゆる時に話しかけることができた、そして、考えの容易な交換によって、皆が自分の考えを豊かにした。……………出版という沢山の声によって彼らは、考えを多数の個人に伝えた」(149)と評価し

⁴ 『全集』第5巻所収の“Texte manuscrit du feuillet collé par Jean-Baptiste Say”。

ている。結局、「印刷することは、より多数に聞こえるように話すことに他ならないのだから、身振りする手と同様、音を発する舌を束縛してはならない。」(155)と論断するのである。

この場合、出版の自由に対する妨げとして議論の主要な対象となるのは検閲であるが、セーは当時のフランスの検閲の状況について次のように認識していた。「思考は、ひとつの精神から他の精神へと伝わる運命であり、誰もそれを途中で止める権利はない。けれどもわが国では今世紀にまだ、天才が、彼の着想の躍動を、しばしばおろかしく常に欲得ずくで臆病な検閲官(un censeur)という羅針盤に委ねなければならない。彼は、寛大であり過ぎることを恐れる、その結果が、些細なことにこだわる厳格さである。」(150下)

セーが当時の検閲に不満を持っていたことがよくわかるが、だからといってセーは、無制限な出版の自由を主張しているわけではない。彼は、「会議の秘密を暴露したり、要職にある人々を中傷的に攻撃したり、その動機を知らずに行政の文書を悪く言う確立された出版の自由は、犯罪、しかも公的に罰せられる犯罪であろう」(153)と述べており、無制限な出版の自由には批判的である。むしろ、彼は「この自由の悪弊、難点を小さくする手段を探し求める」(150)のであり、そのため彼が提案するのは「文芸の法廷(tribunal des lettres)」(153)と呼ぶものである。彼は、これについて次のように述べている。

「文芸共和国と呼ばれるこの理想国をフランスで象徴するであろうひとつの法廷を創ろう。素晴らしい名称、それは、すべての文明諸国民に採用されて心に残すべき自由についての一般的見解を十分に示す。公的な信用と承認を得たこの法廷は、著者の秘密の唯一の受託者であり保証者である一人の書記を選ぶだろう；そして、著者は、自分の著作を印刷に回した際、法により彼に自分の考えを表明することを義務づけられる。」(152)

出版の自由を確立するためのセーのこうした制度創出の主張は、ひとつには彼の専制政治批判とつながっており、もうひとつには習俗を再建するという彼の意図とつながっている。いずれも革命前後のフランスの思想、社会状況を反映しており、革命前のアンシャン・レジーム批判の動きの中に位置づけることができるが、ここでは特に後者の「習俗を再建する」(154)という意識が彼の『オルビー』につながっているということを指摘しておきたい。

なおこうしたセーの主張の背景にあるのは、この「出版の自由」の中で説かれている啓蒙と人間生活の関係についての彼の次のような考え方である。

「精神の光は、日の光のように必要である。日の光がわれわれの家に入り込むやいなや、運動や労働、喜び、すべてがよみがえる、そしてそれ以上に幸福もよみがえる。しかし、もし日光がわれわれから去ると、あるいはわれわれがその道を閉ざすと、不活発状態がやって来る；そして道徳においては、この不活発状態は野蛮に他ならない。」(149)

結局彼は、啓蒙の世紀の知的状況の中で考えているのであり、「本の検閲は、リシュリュー枢機卿の統治下で、……………産まれた；それは、理性の支配下で終わるべきである」(150)と結論している。

3. 「B.フランクリンの生涯の要約」

次は、「B.フランクリンの生涯の要約」である。この論文は、この時期のセーを考える場合にポイントとなる。というのは、セー自身が当時のフランスにおけるフランクリンの紹介に少なからず関わっているからである。一般によく知られているフランクリンの著作といえば、『富にいたる道』と『フランクリン自伝』であろう。経済思想史的に言えば、これらはいずれも勤勉と節約によって富にいたることができると説いた一種の経済的道德論として読むことができるが、セーは1794年に『富にいたる道』の仏訳に「B.フランクリンの生涯の要約」（以下「要約」と略記）をつけているのである。

ここで『富にいたる道』の仏訳に触れておくと、最初の仏訳であるデュブール版は1773年に出版されたがあまり注目されず、多数の読者を得たのは1777年に『善良なりチャードの科学』という題で出たケタンによる二番目の仏訳であった。ケタンの訳はその後版を重ね、セーが書いた「要約」がつけられているのも1794年のケタン訳である。さらに留意しておくべきことは、『自伝』が最初に出版されたのは1791年のパリであり、セーは出版されて間もないこの著作からの引用を多用して「要約」を作成しているということである。

「要約」を見ると、題名が示すようにこの論文はフランクリンの生涯を論じたものであり、冒頭から全体のおよそ四分の三の箇所までは、その大半が『自伝』からの引用で構成されている。これはセーが、1730年までの生涯についてはフランクリン自身が書いた『自伝』に主に依拠しているからで、『自伝』が扱っていない晩年についてはセーが書いている。

セーは、「要約」の中で自分の見解を積極的に述べているわけではないが、勤勉と節約が富にいたる道の基礎であるとするフランクリンの主張に賛成しており、彼について「もっぱら善行をなして彼の国に感謝されつつ世を去り、すべての開明的で善良な人間から尊敬される名前、心地よい記憶だけを思いおこさせる名前の一つを残した」(182)と高く評価していた。

こうしたフランクリンに対する高い評価は別に不思議なことではない。というのは90年代のフランスではフランクリンは多くの人々から高く評価されており、『全集』の編者が述べるように「彼〔フランクリン〕は、1777年から1785年にかけてのオートゥイユの会への参加を通じてイデオログという集団を構成することになる全ての人々と親交があった」(161)のだからセーがフランクリン思想の普及に関わるのも自然なことだといってよいだろう。

むしろ注目されるのは、セーがフランクリンの成功を取りあげる際に、「平等の最もみごとな勝利の一つである；それはわれわれの目を開かせ、われわれの崇高なる共和国の確立を準備する勝利の一つである。」(182)とあって平等に言及していたり、「理性の進歩」(182)といった表現を用いたりするなど、当時のフランス革命の状況を意識しつつ、末期啓蒙の文脈の中でフランクリンを捉えていたという点である。

こうしたセーの知的活動は、『デカド・フィロゾフィック』につながっていく。

4. 『デカド・フィロゾフィック』

『デカド・フィロゾフィック』は、1794年4月から1804年9月まで出版され、さらに誌名を変更して1807年まで存続した。多くの雑誌が短命であった時代に『デカド』がこれだけ続いたというのも興味深い。ここではこの雑誌が創刊されたのが恐怖政治の最中と

いう点に注目したい。創刊を企図し、セーに雑誌への参画を持ちかけたのは P. L. ジャングネとシャンフォールであり、後者は恐怖政治下で逮捕され獄中で自殺をはかり、その際の傷がもとで間もなく亡くなっている。この事実は、『デカド』という雑誌がけっして平和で安定した時代の産物ではないことを如実に示している。『デカド』が「百科全書的野心を抱いた旬刊雑誌の創刊」(14「総序」)という彼らの当初の意図をどれだけ実現しているかについては、やや疑問も残るが、この雑誌が当時イデオログたちとの情報の交換や普及、宣伝の重要な媒体として機能したのは間違いない。実質的にセーによって編集されたのは 1794 年から 1800 年までの期間である。

『デカド』はこの時期のセーの知的活動の中で、編集を実質的に担うという形でまず重要な部分を占めていたわけだが、彼は、この時期『デカド』に彼自身が行なった翻訳を掲載したり、自分の論説を寄稿したりもしている。

セーが翻訳して発表したのは、「雑誌の著者たちへのフランクリンの手紙」と「若者たちの結婚についてのジョン・アレン氏へのフランクリンの手紙の翻訳」の二編であり、さらに原文がフランス語の「育てるべき子供を持っているすべての人への請願書」も掲載している。つまりセーは、フランクリンの著作の翻訳や上述の「フランクリンの生涯の要約」などを通じてフランクリン思想の紹介、普及をおこなっていたわけであり、こうした彼の活動は、大革命末期から総裁政府期にかけてのフランスにおけるフランクリン思想の普及に貢献することになる。

一方、セーが『デカド』に発表した彼自身の論説は「11 人委員会の憲法草案についてのいくつかの意見」、「人民のための劇場[演劇]の計画について *Boniface VERIDICK* から *POLYSCOPE* へ」、「国内問題」、「1792, 1793, 1794 年のマカートニー卿の中国外交使節見聞記(書評)」、等である。これらは、「S」、「J.-B. S」あるいは「*Boniface Véricidick*」といった筆名で掲載されている。多くがフランスの時論的テーマを扱っており、内容が多岐にわたり整理しにくい、いずれにせよそこでは経済的テーマがあまり扱われていない。このように『デカド』を中心としたセーの知的活動はかなり幅広いのであるが、それは世紀末に出版される『オルビー』に結実する。

5. 『オルビー』

『オルビー、すなわち一国の習俗を改良する手段についての試論』は、もともとフランス学士院が、「一国に道徳を樹立するのに最も適した手段は何か？」というテーマで募集した懸賞論文に、セーが応募した論文である。経済学の著作ではないが、セーの経済学を考える場合に見過ごせない著作である。というのはこの著作が、セーにとってなぜ経済学が大切なのかということを考える手がかりになるからである。ここでは経済学の側から『オルビー』を取りあげてみたい。

セーは、『オルビー』で取り組む問題を、「どうやって一国の習俗を改良するか」として捉え、架空の国「オルビー」を持ち出してこの問題について自分の見解を示している。セーによれば、オルビーはもともと絶対君主国であり、およそ半世紀前に革命によって政治的自由を打ち立てたものの、いまだに未完成の状態にあるという。言うまでもなく、ここでセーが念頭に置いているのは革命後のフランスである。彼は、オルビーが習俗、道徳を

改めることによってさらに完成した国家になり得るとするのであり、『オルビー』の課題は、国民に、道徳規範に従い、悪い習俗を改善するよう促すことであった。これに関しセーは、習俗を改善するには人間の意志に頼るべきで、教育によってそれが各人の利益に適ったものだという点を認識させる必要があると主張する。彼は、「いったん創設された良い教育制度は、将来のための種に他ならない。その制度が生み出す人間(達)は、有徳の良い習慣を身につけるだろう、そして彼らの道徳は、他の一切の基礎なしで済ますことができる」(198)と述べ、習俗の改善において教育が果たす役割を強調する。

ではこうしたセーの見解において、経済学はどのような意味を持っているのだろうか。経済学が『オルビー』において大切なのは、経済学の実現する豊かさが、良い教育を可能にし、さらにそれが良い習俗を生みだすと考えていたからである。セーの道徳論は、習俗の改善を課題としており、節約、勤勉によって豊かさを実現する科学である経済学を必要とする。経済学は、まさにこの点で彼の道徳論に関わるのである。その意味で、『オルビー』でセーが経済学について習俗の改善に寄与することを認め、この科学を重要視していたことは明らかである。だからこそセーは、「公立学校で教えるのに適しており、最も下級の公務員や田舎の人々、職人に解かりやすい『初等経済学概論』を著す人は、誰でもその国の恩人であろう」(197)と述べて、良い経済学書の出現を待望しているのである。

この時期のセーにとって経済学が大切な事情は以上によって明らかになったと思うが、アンシャン・レジームから執政政府期までセーの知的活動の成果をほぼ年代順に検討してみると、この時期のセーの知的関心が、はじめから経済の領域に向かっていたわけではないということがわかる。彼の関心は、はじめ文芸一般にあった。それが次第に道徳に向かい、さらに経済の領域に収斂しようとしていたのであり、そこには教育に対する強い関心も存在した。そして、ここに見られる彼の知的活動の特徴は次の三点になる。一つは、従来から指摘されているように彼がイデオログの系譜に位置づけられるということである⁵。第二の特徴は、彼のフランクリン関連の一連の仕事が示すように、この時期の彼の仕事には、道徳論的傾向がみられるということである。そして最後の一つは、彼が英語世界に強い関心を抱いており、実際にその世界とのつながりも持っていたということである。要するに、当時のセーは、英語世界とのつながりを活かして英語を武器に道徳論の領域を中心にイデオログ的な知的活動を展開しており、それが経済の領域に収斂していくことになる。

このように彼の経済思想を含む知的活動の背景には英語世界とのつながりが存在することがわかるが、このつながりは Delessert や Delaroché といった親族のネットワークや、クラヴィエールやデュモンらのジュネーヴ人のネットワークがもとになっている。彼の経済思想は、こうしたつながりがさらにプロテスタントのネットワークや銀行家のネットワークと重層的に重なり合っていてできている社会的ネットワークの中で生まれたものと考えることができる。それにはまた、啓蒙の知の交流に寄与した知識人のネットワーク、啓蒙のネットワークも少なからず関わっていた。

⁵ 例えば E. L. Forget は、この時期のセーについて「セーが観念学によって大きな影響を受けた社会分析を創造した彼の知的生涯の初期」(E. L. Forget, p.4)と表現している。